

VII 結論

番組①は、不二家平塚工場で10年ほど前に働いていた元従業員の内部告発に基づき、賞味期限切れチョコレートが再利用されていた、という疑惑を報じたものだが、それが現在行なわれている確定的事実であるかのような強い印象を与えるなど、視聴者に誤解を与える証言VTR編集やスタジオ演出が行なわれていた。

その背景に悪意がないとしても、結果的にその一部において、内部告発通報者に対する取材調査の不十分さ、チョコレート製造工程に関する認識不足、不注意なVTR編集、番組制作関係者と出演者とのあいだの情報共有システムの不備、断定・断罪的コメント等に起因する不適切な放送をしたことは、放送倫理上、見逃すことができない落ち度であった。

しかし、委員会の調査の結果、内部告発の存在自体に捏造はなく、また番組制作関係者が放送時点においては、通報者が勤務していた当時、上記のようなことが行なわれていたと信じるに足る相応の根拠が存在したことが認められる。十分とは言えないが、その不十分さは内部告発に基づく番組制作の困難さであると考えられ、この点についての放送倫理上の責任を問うことはできない。

番組①において視聴者に誤解を与えた部分は、番組②によって訂正とお詫びがなされ、視聴者に与えた誤解の多くは修正された。とはいえ、番組①と番組②のあいだに3カ月近い時日がかかったこと、訂正とお詫びの主語や範囲が曖昧であったことなど、今後に課題を残している。

これらの不十分さや不備や曖昧さは、怠慢、不勉強、不誠実の誹りを免れないが、いずれも個人的資質等に帰すべき事柄ではなく、番組制作体制そのものが内包する深刻な欠陥としてとらえるべきである。幾百万、幾千万人という視聴者が見ている番組を制作・放送する体制がこのようなものでありつづけるなら、番組も放送局も、そしていずれは放送界全体が信用を失うことになる。

「番組は、もっとちゃんと作るべきだ」という委員会席上の委員の肉声をそのまま記しておきたい。これはむろん、委員会の総意である。

なお、内部告発の根幹部分については、今後のTBSの取材調査と不二家の情報開示によって明らかにされるべきものであることは言うまでもない。委員会は、とくにTBSと番組関係者が、ここで指摘した「取材調査」「内部告発VTR編集」「スタジオ演出」「訂正・お詫びの放送のあり方」等々に関わる問題点を真摯に受け止め、放送の果たすべき役割をみずからに問い、視聴者や社会との信頼を着実に築いていくことを期待する。

以上を、委員会の見解とする。